

紅梅一枝

令和七年立机文集

猫蓑会



猫蓑庵二世 鈴木千恵子宗匠



画・佐藤徹心

タイトル『紅梅一枝』について

猫蓑会では『ことし竹』（平成七年）、『松五本』（平成十一年）という二冊の立机文集を刊行した。

前者は、粹庵哲宗匠・一穂庵啓世宗匠・涼月庵あかり宗匠・房連庵麻子宗匠・緑華亭孝子宗匠・梅香庵久美子宗匠・久慈庵弘子宗匠の七名、後者は、唐猫庵瑞枝宗匠・冬霞庵淳子宗匠・臥猫庵千町宗匠・袖菊亭好敏宗匠・卯遊庵志げ子宗匠の五名の立机を記念したものである。「竹」「松」とくれば、次は「梅」。松竹梅が揃った。

猫蓑会の創設者である東明雅先生は、かつて松本に住んでおられた。そのお宅には大きな紅梅の木があり、毎年美しい花を咲かせていたという。明雅先生の教えを継承する新しい宗匠の誕生の記念文集として、『紅梅一枝』とすることが理事会で決められた。

目次

歌仙「花に逝く」	鈴木千恵子 捌	2
ご挨拶	猫蓑庵二世 鈴木千恵子宗匠	2
讃 連句の国の紅梅一枝	猫蓑会副会長 平林香織	3
祝賀 百韻付廻し		4
伊勢派系統図		6

歌仙「花に逝く」 鈴木千恵子 捌

師の教へ守り通して花に逝く
とぎれとぎれに鳴ける松蟬 鈴木千恵子
磯遊びフレアスカート濡らさずに 山田美代子
名を呼びながら友に手を振る 佐藤 徹心
久々に盃かはす月今宵 近藤 純子
零余子を茹でて塩加減よき 千代
隔年の地芝居めざし旅に出む
超望遠のカメラざらりと 純
九回の裏に待つてた大勝負
上腕筋に魅かれ求婚 心
デコルテのブラックパール悪女めく 代
千エロのケースは二重底なり
素顔の首領孫に囲まれ笑みあふる
賑はふ湖畔照らす夏月
蝦夷の地にいつか棲みつく御器嗜
世界遺産の認定を待つ
テーマパーク藤の手入れを入念に
逃水追つて走る少年 千

ナオ
村對抗高さを競ふ奴胤
リーダー見越す先の先まで
朝の行心静かに結跏趺坐
足が吊つたらすぐに漢方
牡蠣の滋味グラタンにして味はへる
知らない客に貰ひ煙草を
帽子と杖似合ふ昭和の男たち
君はロボット科も巧みに
不器用なくせにキスだけ上手い奴
振り返らずに猫のいく路地
織月に機織る音の響きつつ
幼な心に残るはずだま
ナウ
ハロウイーンかぼちや大王待つてゐる
ジントニツクがお勧めの店
探偵はわたしの夢も見つけ出し
移住農業土に親しむ
濃く淡く尾根を彩る山の花
春障子より流れくる琴
純 心 代 千 心 千 代 心 純 代 純 千 心 純 千 代 純 心

ご挨拶

猫蓑庵二世 鈴木千恵子

都下武蔵野に育つ。東京都立大学国文科卒業。
学生時代は近世の文学を学ぶ。特に西鶴のいわゆる俳諧的な文章に興味を持つ。それがきっかけとなり、大学の先輩の二村文人さんに、柏連句会で西鶴の研究者としても有名な東明雅先生を紹介していただいた。以後、関口連句教室で二ヶ月に一度は明雅先生に捌いていただくという、恵まれすぎているような環境で学ばせていただいた。多くの連衆と連句を楽しむ場は、深川連句会に受け継がれている。
都立の定時制高校に長く勤務してきた。多様な生徒と出会い、文章表現について模索したことは、現在の大きな財産となっている。
趣味は、歌舞伎鑑賞、温泉巡り、スイーツの食べ歩き。そういったことをすべて含めて、わたしなりの猫蓑庵二世を務めていきたい。

讃 猫蓑庵二世千恵子宗匠
連句の国の紅梅一枝

猫蓑会副会長 平林香織

千恵子さんの連句愛の深さを誰もが知っている。長い連句歴の中で、早くから俳諧の道で精進するお覚悟をお持ちだったことも。
連句界そして猫蓑会にとつて余人をもつて代えがたい千恵子さんが、ようやく宗匠立机されて、名実ともに連句隆盛の時代を担われることになった。こんなためにたいことはない。
千恵子さんの連句は朗らかで連衆心に満ちている。そして筋が一本通っている。
井原西鶴の『好色一代女』と小野小町の関係についての御論文でお名前を知っていた千恵子さんが、連句の国の住人だと知ったのは平成二十年。千恵子さんは、二村文人さんと巻いた三吟「西鶴のとりもつ縁」で、めくるめく連句の世界にわたしをいざなってくれた大恩人だ。
連句の国にあでやかに咲く紅梅の枝は、これからもっともっと天に伸びて猫蓑会を、連句界を明るく照らすことだろう。

猫蓑庵二世襲号

付廻し百韻

顕微鏡覗き小躍り富太郎 高橋 賢

下校の曲は明日の約束 田中 秀夫

綾取りの橋を渡つて君と会ふ 本屋 良子

マディソン郡は恋のメツカに もりともこ

自分史について見栄張るもご愛敬 江津 ひろみ

家族喜ぶならば増刷 水上 潤子

手作りの餃子かりつと焼き上がり 奥野 美友紀

黒の獵犬少しやせ気味 鷗飼 桜千子

月冴ゆる千の鈴もて鳴らさんか 東條 士郎

回峰行は松籟の中 由井 健

欄干を牛若のごとスケボ跳ぶ 松本 功

ボートで寝てる人はのんびり 篠 はらっぱ

花大樹影の届きて蝌蚪の国 小林 静司

父母に送られ陽炎の駅 市橋 章子

万緑を映して掬ぶ水清し 坂本 孝子

先師の声と聞ける初蟬 鈴木 千恵子

滔々と移り止まない竹帛に 鈴木 了齋

机の下の塵を拾つて 杉山 壽子

お好みの帽子それぞれ掛け並べ 棚町 未悠

杯の新酒の出来はまろやか 長坂 節子

遠望す月は遍く山襖 武井 雅子

薄の原に詩人佇立し 島村 暁巳

^{ニオ}風船も風船売も淋しさう 堀田 季何

観光客の集ふコンビニ 間瀬 芙美

今日一日幸先がいい雲の様 名古屋 富子

寄つて離れて波のまにまに 高塚 霞

料紙へと仮名連ねをり御簾の内 近藤 純子

花紫の君に想ひを 高山 鄭和

ぬばたまの髪 of 乱るる明早し 静 寿美子

寝不足気味の舞台俳優 小原 濤声

愛用のサプリが届く月の宿 小池 正博

松茸薫るひとり七輪 勝又 丘女

子のくぐる色の褪せたる秋の蚊帳 野口 明子

テストにバツがあふれ返つて 式田 香里

バンザイがカラ元気めく解散日 三木 俊子

大事な事をうやむやにする 永田 吉文

おい君と藪から棒に占ひ師 ^{ニウ}佐藤 徹心

懐手して沈思黙考 福澤 をんみ

もつたいぶつてだるまさんいま転んだと 植田 円水

すねた素振りも駆け引きのうち 上原 揺子

言葉より愛の証が欲しいのよ 名本 敦子

ベビーシューズを至急注文 渡辺 柚

森の家に大中小の謎の椅子 山中 たけを

桃の里へと拾ふ麴麩屑 岩田 蝸舎

月おぼろうさぎのダンスタラララと 近藤 蕉肝

證誠寺にも亀の鳴く頃 浅賀 丁那

入り彼岸旧友の顔見忘れて 高橋 豊美

春愁の中指の爪切る 五十嵐 讓介

東帯の花奉る長廊下 村松 定史

丸に十字の紋の和時計 平林 香織

すらすらと羅旬語希臘語読みこなし

松島 アンズ

何かといへば寮歌放吟

大津 博山

我が里の長きつり橋青時雨

市野沢 弘子

あまごの素揚げ箱膳の上

丹下 誓

繰り返し手紙の丸い字を撫でて

高松 霞

妻の俤抱いてシエルター

狩野 康子

芝濱を夢か現か聴き直す

梅村 光明

千年続く輪島朝市

由雄 白山

折鶴に几帳面さが見て取れて

竹中 墨

棟梁びしりはじく墨壺

林 転石

新しき羅針盤付け大海へ

大島 洋子

Aーの技フルに活用

山田 美代子

しらを切る嫦娥に謎をかけてゐる

佛測 雀羅

そぞろに寒き崑崙の峰

内田 遊眠

私の位置三次元では測りかね

宇田川 肇

あたり蹴散らし穴を掘る犬

荒木 鑑

縁先で競つて跳ばす西瓜種

白崎 ひろ子

皆揃つて冷で乾杯

北龍 志保子

うきつきとフォークダンスのオクラホマ

聖成 美智子

名うてのドンファンわざと肩触れ

今井 多紀子

年頃の星の王子も婚の頃

服部 秋扇

乳母車行く暮早き坂

渡辺 恵子

予算より高い熊手が立派さう

佐々木 有子

国の未来は議論尽くして

飯島 幸子

行儀よく横一列に並ぶ豚

門野 優

物なき部屋に大の字に寝る

竹中 禎子

マンガ家を目指す瞳に望の月

鈴木 善春

有り合せなる野仏に柿

下鉢 清子

百歳はどうに過ぎたと菊の酒

南雲 玉枝

祖母のデイケア雀荘と化す

馬場 由紀子

つもつたと機嫌上々ひばり節

武井 敦子

赤い車でめぐる横浜

國司 正夫

ちらり見る谷間にゆれるペンダント

根津 忠史

情夫と云はれてなにか嬉しい

西田 荷夕

尼寺は四季折々の手料理を

岩崎 あき子

日に一回はセサミンをとる

石川 葵

開けゴマ開かぬ金庫に送る念

井上 里美

ひとくと厭ふ木菟照らす月

小川 廣男

滝はこつちみんなで森に分け入つて

宮川 尚子

擦りむく膝にしゆつとマキロン

古和田 雲吞

懐かしき青春の歌返り花

高尾 秀四郎

火の国の山遠きふるさと

上月 淳子

帰るよと父の呼ぶ声秋小寒

五郎丸 照子

猫看取りしと友からの文

箭内 敏枝

好敵手チーズの穴に隠れゐて

島崎 市誠

テイラノの化石秘密基地には

植田 結衣

紙切りを腕白たちが喜んで

木越 秀葉

絵凧を追つて野ゆき丘こえ

御園 魚彦

天上も天下も今し花の宴

大野 鶴士

百千鳥鳴きはづむ談笑

鈴木 英雄



令和六年七月九日 起首
令和七年一月十四日 満尾

伊勢派系統図

芭蕉	松尾氏 伊賀国 (一六四四―一六九四)	
北枝	鳥翠台	馬かりて燕追ひゆくわかれかな しら雪のまだあらみの、行衛かな
希因	暮柳舎	鶯のあかるき声や竹の奥 吉野見た足可愛がる炬燵かな
闌更	二夜庵 芭蕉堂	枯れ芦の日に日に折れて流れけり 紅葉ちつて竹の中なる清閑寺
蒼虬	槐庵二世 対塔庵	柴の戸を左右にあげて花の春 鈴鴨の虚空に消ゆる日和哉
芹舎	泮水庵	春の水何処によどみもなかりけり 行秋や入日の末の鳥おどし
凌冬	呉竹庵	月さして涼しう成りし膝がしら 撫子や咲ぶりに名のあやまたず
芦丈	抱虚庵 芋庵	雲よ霞と六十余年花乞食 土窯石窯古代の人の秋思ふ
明雅	猫蓑庵	風光る卵の黄味の濃くなりて 安曇野は昏れてむらさき春炬燵
千恵子	猫蓑庵二世	昼の酒連れいつよりか雪女
	鈴木氏 東京都	



猫蓑庵二世千恵子宗匠の著書「杞憂に終わる連句入門」
(文学通信二〇二〇年)
共著に『連句 学びから遊びへ』(おっふう二〇〇八年)など

紅梅一枝

令和七年立机文集

令和七年一月二十日発行(非売品)
編集・発行 猫蓑会

